

不思議に満ちた世界

現代社会では、基本的に科学で証明できないものは存在しないとされています。アイヌ社会はこれとは全く異なり、現代人の私達が認めないもの（神）の存在



佐賀 彩美 (さが あやみ)

一般社団法人北海道開発技術センター
調査研究部 研究員

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モンレー国際大学院（現ミドルベリー国際大学院モンレー校）通訳翻訳学科修士課程修了。通訳案内士。

に重要な意味をもたせ、生活全般に亘りそれとの良好な関係を保持することで幸福度の高い状況が出現するのだという思想を暮らしの基礎としていました。

例えば、アイヌ民族は、火、太陽、風、雨、雷のように人間の力が及ばない自然現象や自然界、人間にはない能力をもつ動物や有用な植物、亡くなった人、人間が作った物体まで、存在するあらゆるものに靈魂をみとめ、人同様に個性や機能の軽重はあったとしても、カムイ（神）として崇敬していました。それ以外にも、個々人の運勢を左右し、自己努力に応援の手を差し伸べ、生涯を共にする憑神というものがあり、その人を守るだけでなく、ときには戒めを与えて当人の方向を正すものと考えられていました。そして、諸々の神々や個人の憑神などと人とを仲立ちする巫術師の存在が重要な役割を果たしていました。アイヌ語ではトウス・クル（震動する一人）といい、これは巫術をする際、身体が震え躍動することに由来しています。また、樺太ではサマンといい、英語でいうシャーマンです。巫術師の仕事は病気の治療から恋愛相談、失せ物探し、雨乞いなど様々でしたが、医師同様に専門分野がありました。また、人間の切なる願いをカムイや憑神に取次ぐだけでなく、神からの啓示も伝えていました。巫術師は目的に応じて死者と交信したり、狐やアホウドリの神に願ったり、全てを透視できたりなど色々でした。樺太にいた沼端ラハランケという著名な老人は、太鼓を打ちたたきながら、依頼人が海に落としたという金のキセルを拾い出してみせたといいます。ま

た、手負いにさせられた熊を巫術で足止めをすることももあり、ご託宣でその熊の居場所を明示され現場に赴くと、実際にその場所にいたそうです。このように、

巫術師はアイヌ社会になくはない存在でしたが、金品を請求することは一切ありませんでした。これは、巫術師の憑神が返礼に求めるのはお金ではなく、人々からの崇敬だったからです。このため、巫術師の生活は、村人や依頼者が食料を付け届けることで支えられていたのです。

巫術師ばかりではなく、他人のお財布の中身まで透視する人、頭痛の状態の違いで来客の性別、年齢、用向きなどがわかる人など、アイヌの人々の暮らしには不思議なことが沢山ありました。多種多様な生き物がまるで人間のように描かれるユーカラなどの物語にしても、自然界からすっかり遠ざかって生きる現代の私達には想像しがたい世界のようにですが、アイヌの人々は実際の生活のなかで起きたこととして素直に受け止めていました。

例えば、生き物のなかでも力のあるカムイとされていた蛇が穀物蔵に居れば穀物を守っているとして追い払わずに豊穰を願い、木から落ちてくれば良いことの予兆であるとして拝礼し、蛇が左から右へ移動すればよいが、その逆だと災いを予知しているなど、動物の生態も重要な生活情報とみなされていました。現代社会は、動植物の都合などおおかまいなしに人間の欲が優先されています。しかし、人間社会の全てのものの存在が魂を持っていると考え尊重し、その声に耳を傾け、行動に注意を払うなど、相互に親密な関係を築いてきたアイヌの世界は何と心豊かなことかと思えます。

*本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として（一社）北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。

藤村 久和 氏 北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般（精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療（整体ほか）等）を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践している。また、アイヌ民俗文化財調査（北海道教育委員会）に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する傍ら、國學院大學北海道短期大学部（滝川市）で開催のペカンベ祭で伝統料理を提供している。主な著書：『アイヌの霊の世界』（小学館、1982年）、『アイヌ、神々と生きる人々』（福武書店、1985年）、『アイヌ学の夜明け』（梅原猛氏との共編、小学館、1990年）、『知里真志保フィールドノート(6),(7)』（北海道教育委員会、2007、2008年）、『平成20～29年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1～9』（北海道教育委員会、2008～2017年）等。